

## 英語・韓国語・中国語を母語とする初級日本語学習者の作文過程 —母語使用の観点から—

石毛順子

### 要旨

本研究は、日本語初級レベルの英語母語話者、韓国語母語話者、中国語母語話者の日本語作文過程における思考活動の差異を見出し、さらに中級と思考活動を比較することを目的とした。発話思考法により記録された作文過程の発話プロトコルの母語部分を石毛(2011a, 2011b, 2012b)と同じ思考カテゴリーに当てはめ、分析した。学習者の母語と母語使用の関係を検討するために $\chi^2$ 検定を行ったところ、母語使用の分布に有意傾向が見られ、中国語母語話者は英語母語話者・韓国語母語話者とは母語使用率が異なることが示された。母語での思考活動の度数分布について $\chi^2$ 検定を行ったところ、思考活動の度数分布に有意差が認められた。残差分析の結果、英語母語話者は作文の進め方や言語形式への言及、中国語母語話者は読み直し、韓国語母語話者は日本語で書く前の母語による言語化の頻度が高いことが示され、これらの思考活動は中級でも頻度が高かった。

### キーワード

作文過程、母語使用、初級学習者

### 1. 先行研究と本研究の目的

教材や教え方を開発・改善する際には、学習者がどのように活動を行っているのか知ることが必要であろう。本研究の対象とする作文では、作文そのものを調査対象として検討することももちろん重要だが、同時にどのように作文を書いたのかということも重要であると思われる。また、「初めから日本語で考えて書く習慣をつけたいものである」(姫野, 1980: 2)とあるように、Friedlander(1990)によると伝統的に教師は作文を書くときに目標言語で考え、書く必要性を強調していたが、学習者が母語を用いていることは事実であり、どのように母語を用いているのか知ることが意味があると思われる。

作文過程における思考を知り、記述する方法の一つとして発話思考法が知られている。発話思考法とは、思考を口に出して音声化する方法である。この発話思考法を用い、日本語学習者の作文過程を対象として作文過程での母語使用に言及した研究には、大竹・園田・広江(1993)、石橋(2002)、石毛(2011a, 2011b, 2012a, 2012b, 2013)などがある。これらの多くで分析されているのは母語が同じである学習者の日本語レベルや作文の成績による母語使用の差異である。異なる母語話者の作文過程での母語使用の差異について述べられているのは石毛(2011a, 2011b)のみである。

石毛(2011a)は初級の韓国語母語話者と英語母語話者を対象とし、母語の使用率と使用方法を比較している。両者ともに作文過程で母語を多く使用しているが、韓国語母語話者がより母語を使用し、韓国語母語話者に「日本語で書いた文を母語で読み返す」「母語から日本語へ翻訳する」という活動、英語母語話者に「母語で言語形式(文法、語彙、表

記)に対して言及する」が特徴的に多く見られている。中級の英語母語話者・韓国語母語話者・中国語母語話者を対象とした石毛(2011b)では、英語母語話者は作文過程で母語を使用する率が高いが韓国語母語話者・中国語母語話者は作文過程で母語を使用しない率が高かった。英語母語話者では「母語で言語形式に対して言及する」、「母語で作文の進め方(テーマ選定、構成・内容の検討)に対して言及する」、韓国語母語話者では「母語から日本語へ翻訳する」、中国語母語話者に「日本語で書いた文を母語で読み返す」、「母語から日本語へ翻訳する」が特徴的に多く見られた。

上述のように、異なる母語話者での作文過程の比較は少なく、中級を対象とした石毛(2011b)において、文法と語彙に類似性のある韓国語、表記に類似性のある中国語、外来語以外に類似性の少ない英語の母語話者を調査することで、作文過程の差異の要因を探求できるのではないかと述べられているが、初級を対象とした石毛(2011a)では中国語母語話者は対象とされていなかった。そのため、作文過程の差異の要因が十分に探求できていなかったのではないと思われる。そこで本研究は、石毛(2011a)で明らかにされている英語母語話者・韓国語母語話者のデータに英語母語話者・韓国語母語話者のデータをさらに加えた上で、中国語母語話者も調査対象とし、初級の英語母語話者・韓国語母語話者・中国語母語話者の作文過程の差異を見出すこと、また同一の分析基準を用いた石毛(2011b)の中級<sup>(1)</sup>の結果を参照しながら、各母語話者の特徴を見出すことを目的とする。

## 2. 方法

「1. 先行研究と本研究の目的」で述べたように石毛(2011a)で明らかにされたデータを用いるため、方法のうち2.2以降のテーマ、手続き、分析方法は石毛(2011a)になった。

### 2.1 参加者

日本語初級<sup>(2)</sup>の英語母語話者1名、韓国語母語話者1名、中国語学習者4名であった。分析はこのデータに、石毛(2011a)で明らかにされている英語母語話者4名、韓国語母語話者3名のデータを加え、計英語母語話者5名、韓国語母語話者4名、中国語母語話者4名のデータで行った。

### 2.2 作文のテーマ

参加者は、「高校生活と大学生活」、「自国<sup>(3)</sup>の食べ物と日本の食べ物」、「田舎の生活と都会の生活」等の7つのテーマの中から1つを自由に選択して作文を書いた。テーマを選択できるようにしたのは、自分の苦手とするジャンルのテーマのために書けないということを防ぐためであった。7つのテーマは石毛(2011a, 2011b, 2012b)などと同じであり、そのうち6つは石毛(2012a)、「自国の食べ物と日本の食べ物」等4つは石橋(2002)でも用いられていた。

### 2.3 手続き

作文過程で考えていることや作文過程での行動を知るための調査であるということを説明し、考えていることをできるだけ口に出すよう依頼した。日本語の作文でも日本語です

べてを思考しているとは限らないため、口に出す言葉は日本語でも母語でもよいとした。次に発話思考法を、繰り上がりの必要な計算、母語での作文、日本語での作文の順で練習した。所要時間は約1時間であった。参加者に、作文過程では干渉・アドバイスをしないが、参加者が沈黙してしまった際は「話してください」と書いたカードで指示すると伝えた。そして作文用紙とテーマの書かれた紙を渡した。辞書や教科書など、作文に参加者が必要とするものの使用は事前に全て許可していた。作文過程はビデオで撮影し、ICレコーダーで録音した。作文の所要時間は平均23.7分(最長49.5分、最短9.0分)であった。

## 2.4 分析方法

分析はチェックリスト法を用いた<sup>(4)</sup>。補助資料として発話プロトコル、参加者の書いた作文とメモを参考にし、ビデオを見ながら1分単位で区切って観察対象となる行動の有無を実験者がチェックした。本研究では3.1において母語使用の有無を検討するが、例えば0:00~0:59に母語使用があれば、「母語あり」として1カウント、1:00~1:59に母語使用がなければ「母語なし」として1カウントした。発話プロトコルの文字起こしは日本語部分を調査者が行い、母語部分を参加者本人またはその言語の母語話者が行った。観察対象とする作文過程の行動カテゴリーは石毛(2011a, 2011b, 2012b)と同一である、「日本語で書いた文を母語で読み返す」、「母語で作文の進め方(テーマ選定、構成・内容の検討)に対して言及する」、「母語で言語形式(文法、語彙、表記)に対して言及する」、「母語から日本語へ翻訳する」であった。石毛(2011a)データを用いることと、石毛(2011b)と比較することから、石毛(2011a;2011b)の4つの行動カテゴリーと本研究のカテゴリーは同様にした。この4つの行動カテゴリーに限定した理由として、石毛(2011a)では頻度が高いことがあげられていた。3.2で行った母語を用いた思考活動の分析では、例えば0:00~0:59に「日本語で書いた文を母語で読み返す」「母語から日本語へ翻訳する」が見られた場合は、それぞれ1とカウントした。

## 3. 結果・考察

### 3.1 初級学習者の作文過程における母語使用頻度の違い

学習者の母語と母語使用の関係の傾向を検討するために、母語使用の度数分布について3(学習者の母語)×2(母語使用の有無)の $\chi^2$ 検定を行ったところ、母語使用の分布に有意傾向の偏りが認められた( $\chi^2(2)=5.624, p<.1$ )。残差分析の結果、期待値より初級の中国語母語話者は母語を使う頻度が有意に低く、母語を使わない頻度が有意に高かった(表1)。したがって、初級の英語母語話者・韓国語母語話者と中国語母語話者では母語を用いる比率が異なるということが明らかとなった。

表 1 学習者の母語と母語使用のクロス表<sup>(5)</sup>

		母語		合計
		あり	なし	
英語	度数	101 (95.2)	30 (35.8)	131
	比率	77.1%	22.9%	
	調整済標準化残差	1.5	-1.5	
韓国語	度数	47 (44.3)	14 (16.7)	61
	比率	77.0%	23.0%	
	調整済標準化残差	.9	-.9	
中国語	度数	62 (70.5)	35 (26.5)	97
	比率	63.9%	36.1%	
	調整済標準化残差	-2.4*	2.4*	
合計	度数	210	79	289

\*  $p < .05$

### 3.2 初級学習者の作文過程における母語を用いた思考活動の違いと具体例

3.1 において、初級学習者において母語により母語使用の比率が異なることが明らかとなった。母語の使い方に違いがあるのかについても検討する。

#### 3.2.1 初級学習者の作文過程における母語を用いた思考活動の違い

思考活動の度数分布について 3(学習者の母語)×4(思考カテゴリー)の $\chi^2$ 検定を行ったところ、思考活動の分布に有意な偏りが認められた( $\chi^2(6) = 100.488, p < .001$ )。残差分析の結果、英語母語話者は「母語で言語形式に対して言及する」と「母語で作文の進め方(テーマ選定、構成・内容の検討)に対して言及する」の頻度が期待値より有意に高く、「日本語で書いた文を母語で読み返す」「母語から日本語へ翻訳する」の頻度が期待値より有意に低かった(表 2)。韓国語母語話者は、「母語から日本語へ翻訳する」の頻度が期待値より有意に高く、「母語で言語形式に対して言及する」の頻度が期待値より有意に低かった(表 2)。中国語母語話者は、「日本語で書いた文を母語で読み返す」の頻度が期待値より有意に高く、「母語で作文の進め方(テーマ選定、構成・内容の検討)に対して言及する」と「母語で言語形式に対して言及する」の頻度が期待値より有意に低かった(表 3)。したがって、初級においては、英語母語話者が「母語で言語形式に対して言及する」と「母語で作文の進め方(テーマ選定、構成・内容の検討)に対して言及する」、韓国語母語話者が「母語から日本語へ翻訳する」、中国語母語話者が「日本語で書いた文を母語で読み返す」を特徴的に多く行っていることが明らかとなった。

表2 学習者の母語と母語を用いた思考活動のクロス表

		読み返し	進め方	言語形式	翻訳	合計
英語	度数	8(28.7)	38(26.7)	41(23.3)	55(63.3)	142
	比率	5.6%	26.8%	28.9%	38.7%	
	調整済標準化残差	-6.1**	3.4**	5.7**	-2.0 *	
韓国語	度数	9(12.9)	14(12.0)	4(10.5)	37(28.5)	64
	比率	14.1%	21.9%	6.3%	57.8%	
	調整済標準化残差	-1.4	.7	-2.5*	2.4 *	
中国語	度数	41(16.4)	2(15.2)	2(13.3)	36(36.1)	81
	比率	50.6%	2.5%	2.5%	44.4%	
	調整済標準化残差	8.0**	-4.4**	-4.0**	.0	
	度数	58	54	47	128	287

\*\*  $p < .01$ , \* $p < .05$

### 3.2.2 「日本語で書いた文を母語で読み返す」の具体例

3.2.1 で述べたように、初級の中国語母語話者において「日本語で書いた文を母語で読み返す」ということを期待値より有意に多く行う傾向があることが明らかとなった。初級の中国語母語話者の発話プロトコルの具体例を検討する。

例 A：つまらない、つまらない、(「つまらな」まで書いた後に) つまらない、(「いでした」と書いた後に) 很無聊【つまらない】<sup>(6)(7)</sup>でした。

例 B：大学、學校【学校】に行きました、私の学校、屏東【屏東、台湾の地名】、到家裏【家まで】、所以每天要做校車【だから、毎日スクールバスに乗ることになる】50分かかりました。

例 A は該当部分を書いた直後に読み返した例であるが、例 B は直後の読み返しではなく、作文をほとんど書き終えた後に、最初から読み返したものである。初級の韓国語母語話者と英語母語話者を対象とした石毛(2011a)は、韓国語母語話者だけではなく語順の異なる英語母語話者でも文単位での読み返しが行われていることから、母語による読み返しは文の正確さの確認だけではなく内容の確認にも用いられている可能性を述べ、中級で英語母語話者・韓国語母語話者・中国語母語話者を対象とした石毛(2011b)でもこの知見を支持していた。初級を対象とした本研究で、英語と同様に日本語と語順の異なる中国語でも文単位での読み返しが見られたことにより、母語の読み返しの機能として内容の確認が含まれることがより支持された。

### 3.2.3 「母語で作文の進め方(テーマ選定、構成・内容の検討)に対して言及する」の具体例

3.2.1 で述べたように、初級の英語母語話者において「母語で作文の進め方(テーマ選定、構成・内容の検討)に対して言及する」ということを期待値より有意に多く行っていることが明らかとなった。初級の英語母語話者の発話プロトコルの具体例を検討する。

例 C : 日本の家、what's my home like, 私の、私の、うん、日本、の、家、は、ちよつと、つ、つまらない、(石毛 2011a:4)

例 D : (下書きをしながら) all girl students, umm, hmm, yeah less free time, um, have, teachers? no, oh less freedom, I don't know if that works. less freedom(石毛 2011a:5)

石毛(2012b)で英語を母語とする上級学習者でこのような執筆前の内容検討がよく行われていたことが述べられているが、初級でも内容検討が執筆中(例C)、下書き中(例D)に行っている例が見られた(石毛 2011a)。それが母語で行われていたことにより「母語で作文の進め方(テーマ選定、構成・内容の検討)に対して言及する」の頻度が高くなっていったと思われる。

### 3.2.4 「母語で言語形式(文法、語彙、表記)に対して言及する」の具体例

3.2.1 で述べたように、初級の英語母語話者において「母語で言語形式(文法、語彙、表記)に対して言及する」ということを有意に期待値より多く行っていることが明らかとなった。初級の英語母語話者の具体例を検討する。

例 E : たくさん友達、はい、たくさんたくさんたくさん isn't that an adjective? that's what I learned, (石毛 2011a:7)

例 F : 鳥、し、so it looks like a bird on a mountain,鳥、(石毛 2011a:7)

例 E は文法に対する言及、例 F は表記に対する言及である(石毛 2011a)。韓国語は日本語と文法に類似性があり(家村 1994)、中国語は漢字を用いるという類似性があるが、英語は両方ともに当てはまらないために文法・語彙の知識を再確認しながら書く必要があるので、「母語で言語形式(文法、語彙、表記)に対して言及する」が多く見られたと考えられる。

### 3.2.5 「母語から日本語へ翻訳する」の具体例

3.2.1 で述べたように、初級の韓国語母語話者において「母語から日本語へ翻訳する」ということを有意に期待値より多く行っていることが明らかとなった。初級の韓国語母語話者の発話プロトコルの具体例を検討する。

例 G : 味を、을【を】 좋아한다고【好むと】 생각합니다【思います】 を、を、を、好き、好き、好き、だと思えます。(石毛 2011a:6)

例 H : 自然、自然の、(辞書をひく) 환경【環境】、環境(石毛 2011a:6)

韓国語から日本語への翻訳は、例Gのように句や文を日本語に翻訳することもあったが、例Hのように日本語の文を想起している中で一部の単語を韓国語でまず表出し、その単語を辞書で調べて日本語に翻訳することが多かった(石毛 2011a)。さらに石毛(2011a)は韓国語と日本語は語順が似ていることにより両者をスイッチしても思考の流れを妨げないため、韓国語母語話者はわからない単語はまず韓国語で表出し、翻訳しているとしていた。英語と同様に語順の異なる中国語の母語話者を加えた本研究の分析でも韓国語母語話者の「母語から日本語へ翻訳する」が多く見られたことで、語順がこの思考活動の頻度に影響を及ぼすことが支持された。

### 3.3 初級学習者と中級学習者の作文過程における母語使用の比較

3.1 と 3.2 で得られた知見をもとに、石毛(2011b)での中級での結果を参照しながら、各母語話者の特徴を見出していく。

母語使用率について見てみると、本研究の初級においては英語・韓国語・中国語母語話者はともに母語使用率が高かったが、中国語母語話者は英語・韓国語母語話者と母語使用率が異なることが示された。石毛(2011b)によると中級は母語使用率が高いのは英語母語話者のみであった。したがって、英語母語話者は初級でも中級でも母語を作文過程の思考の道具として多く用いていることが示された。

思考活動については表3に特徴的に多く見られた活動をまとめた。初級・中級ともに特徴的に多く見られたものは、英語母語話者は「母語で作文の進め方(テーマ選定、構成・内容の検討)に対して言及する」と「母語で言語形式に対して言及する」、韓国語母語話者は「母語から日本語へ翻訳する」、中国語母語話者は「日本語で書いた文を母語で読み返す」であった。英語と韓国語では初級・中級において特徴的に多く見られた思考活動が同一であったが、中国語母語話者では中級では特徴的に多く見られた「母語から日本語へ翻訳する」が、初級では比率としては高いものの、特徴的に多く見られるわけではないということが明らかとなった。

表3 学習者の母語使用において特徴的に多く見られた活動

	読み返し	進め方	言語形式	翻訳
英語		初級 中級	初級 中級	
韓国語				初級 中級
中国語	初級 中級			中級

この違いの要因を考えてみる。まず英語母語話者は「母語で言語形式(文法、語彙、表記)に対して言及する」が特徴的に見られるように、日本語の文法や語彙を母語で確認する必要があった。韓国語母語話者は漢語の語彙だけでなく文法も類似性が高いため、想起したものをそのまま日本語に置き換えることができた。中国語母語話者は漢語の語彙と表記で類似性はあるが、文法の類似性は低い。また、中国語・韓国語と類似性が見られる漢語が多く導入されるのは、中級以降であろう。したがって、初級の中国語母語話者は表記以外では類似性が低く、むしろ差異がある文法や語彙を翻訳するほうが困難なために、中級で特徴的に多く見られた「母語から日本語へ翻訳する」が多く見られなかったと思われる。上級を検討する必要があるとは思われるが、ある言語の母語話者において初級・中級で共通して特徴的に多く見られた思考活動は、その母語話者の作文過程に特徴的に見られる思考活動と言えるのではないだろうか。

#### 4. 本研究のまとめと課題

以上のように、初級においては英語母語話者・韓国語母語話者・中国語母語話者ともに母語を作文過程で多く用いていることが明らかとなったが、同時に英語母語話者・韓国語母語話者と中国語母語話者では母語を用いている比率が異なることが示された。本研究の結果は英語母語話者と韓国語母語話者のみを対象とし中国語母語話者を対象としなかった石毛(2011a)と異なっており、石毛(2011a)では母語使用が韓国語母語話者で多く見られたのに対し、本研究では英語母語話者で多く見られた。

母語話者別の母語の具体的な使用方法を整理する。初級において英語母語話者は「母語で言語形式に対して言及する」と「母語で作文の進め方(テーマ選定、構成・内容の検討)に対して言及する」を特徴的に多く行っており、文法・表記ともに日本語と母語と類似性が少ないために母語を用いて言語形式を確認していることと、母語を用いて執筆前に内容の検討を行っていることを示唆した。韓国語母語話者は、「母語から日本語へ翻訳する」が特徴として多く見られたが、これは語順の類似性から母語で想起しても単語を置き換えれば日本語の文章になるという利点を利用していたと思われる。中国語母語話者は、「日本語で書いた文を母語で読み返す」が特徴的に見られたが、文および作文全体の内容を母語で読み直すことで確認していたと考えられる。使用方法でも石毛(2011a)と異なる結果が一部見られた。石毛(2011a)では英語母語話者で特徴的に多く見られたのは「母語で言語形式に対して言及する」のみであったが、本研究では「母語で作文の進め方(テーマ選定、構成・内容の検討)に対して言及する」も多く見られた。

また、中級を対象とした石毛(2011b)を参照することにより、初級では英語・韓国語・中国語母語話者ともに母語をより多く用いており、母語を作文過程の思考の道具として用いているが、中級になると母語を作文過程の思考の道具として多く用いているのは英語母語話者のみになるということを示唆した。そして、英語母語話者には「母語で言語形式に対して言及する」と「母語で作文の進め方(テーマ選定、構成・内容の検討)に対して言及する」、韓国語母語話者には「母語から日本語へ翻訳する」、中国語母語話者には「日本語で書いた文を母語で読み返す」が特徴的に見られる活動である可能性を示した。さらに、中国語母語話者において「母語から日本語へ翻訳する」が初級・中級で共通に特徴的に見られず、中級のみの特徴的に見られた一因として漢語が中級になって多く用いられるようになることを可能性としてあげた。

本研究より以上のような知見が得られ、初級の英語母語話者、韓国語母語話者、中国語母語話者の作文過程の差異と英語母語話者、韓国語母語話者、中国語母語話者の作文過程に特徴的に見られる活動が明らかとなった。しかし本研究は初級・中級で共通に見られた活動がその母語話者に特徴的な活動である可能性を示唆したが、上級も今後も継続的に調査を行い、信頼性の高い結果にしていく必要があるだろう。

(石毛順子 いしげじゅんこ・国際教養大学・ishige@aiu.ac.jp)

#### 注

1. 主教材として『中級の日本語 改訂版』(三浦・マグロイン 2008)を用いるクラスに調査時点で所属している学生が「中級」とされていた。



2. 石毛 (2011a) では主教材として『初級日本語げんき 2』(坂野・大野・坂根・品川・渡嘉敷 1999) を用いるクラスに調査時点で所属している学生が「初級」とされており、本研究でも同様であった。
3. テーマを提示する際は、「自国」ではなく参加者の出身国・地域を示した。
4. チェックリスト法とは、あらかじめ定めた観察項目の生起をチェックする方法である (矢澤 2000)。
5. 表 2、表 3 とともに( )内の数値は期待値である。
6. 以下、【 】内は協力者による直前の中国語または韓国語の日本語訳である。
7. 以下、下線部分がカテゴリーの例にあたる部分である。

#### 付記

本研究は科学研究費若手研究 (B) 「第二言語作文のプロセスモデルの構築」(研究課題番号 21720189) の助成を受けたものである。

#### 参考文献

- 石毛順子(2011a) 「英語または韓国語を母語とする初級日本語学習者の作文過程—母語使用の観点から—」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』 第3号, 1-8.
- 石毛順子(2011b) 「英語・韓国語・中国語を母語とする中級日本語学習者の作文過程—母語使用の観点から—」『留学生教育』 第16号, 81-87.
- 石毛順子(2012a) 『第二言語習得における作文教育の意義と特殊性』 風間書房
- 石毛順子(2012b) 「英語を母語とする日本語学習者の作文過程—母語使用の観点から—」『留学生教育』 17号, 73-79.
- 石毛順子(2013) 「中国語を母語とする日本語学習者の日本語作文過程での中国語使用」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』 第5号, 29-37.
- 石橋玲子(2002) 『第2言語習得における第1言語の関与』 風間書房
- 大竹弘子・園田愛・広江浩一(1993) 「THINK-ALOUD プロトコルを用いた日本語学習者の作文過程及びストラテジーの分析」『1993年度日本語教育学会秋季大会予稿集』 105-110.
- 坂野永理・大野裕・坂根庸子・品川恭子・渡嘉敷恭子(1999) 『初級日本語 げんき 2』 ジャパンタイムズ
- 姫野昌子(1980) 「文章表現の指導」『日本語教育』 43, 1-16.
- 三浦昭・マグロイン花岡直美(2008) 『中級の日本語 改訂版』 ジャパンタイムズ
- 矢澤圭介(2000) 「行動観察法」 田島信元・西野泰弘 (編) 『発達研究の技法』 5章 1節, 福村出版, 108-110.
- Friedlander, A. (1990) Composing in English: Effects of a first language on writing in English as a second language. In Kroll, B. (Ed.), *Second language writing: Research insights for the classroom*, New York: Cambridge University press.